

【研究ノート】

幼児の外部情報のソースモニタリングに感情喚起語が及ぼす影響と発達的变化

近 藤 綾

はじめに

記憶する際には、事実や出来事といった情報の記憶だけでなく、その情報をいつ、どこで、誰から聞いたのかという情報源を記憶することも重要になる。情報源の記憶の想起に関する認知プロセスはソースモニタリングと呼ばれ、外的に得られた記憶か内的に得られた記憶かによって、リアリティモニタリング、内部情報のソースモニタリング、外部情報のソースモニタリングの3種類に分類される (Johnson, Hashtourdi & Lindsay, 1993)。外部情報のソースモニタリングは、例えば、男性が言ったことなのか女性が言ったことなのかの識別のように、外的に得られた情報の情報源を識別するものであり、子どもを対象にした従来の研究からは、この能力が4-6歳の幼児期に急速に発達することが報告されている (Gopnik & Graf, 1988; 近藤, 2009; 近藤, 2010a, 2010b; Lindsay, Johnson, & Kwon, 1991; Drummey & Newcombe, 2002; Sluzenski, Newcombe, & Ottinger, 2004)。

外部情報のソースモニタリングにおける幼児期の発達的变化は4-6歳児において確認されるものの、この年齢間でどのような発達差が生じているのかについて厳密には一貫していない。具体的には、年少児、年中児、年長児を対象に情報量と文脈を操作してソースモニタリング課題を実施した近藤 (2009) では、単語課題では年齢による発達差がなく、自己紹介文課題において年少児 (4歳2か月) よりも年中児 (5歳3か月) と年長児 (6歳2か月) のソースモニタリングが正確であるという発達的变化が示されている。また、4-6歳児を対象に単語情報を提示して音声と映像を識別するソースモニタリング課題を用いた近藤 (2010a) では、4歳児と5歳児よりも6歳児のソースモニタリングが正確であるという発達的变化が示されている。そして、年少児、年中児、年長児を対象に情報量と文脈を操作する4条件 (単語課題、好きな単語課題、文課題、自己紹介文課題) を設けてソースモニタリング課題を実施した近藤 (2010b) では、年少児 (4歳2か月)、年中児 (5歳2か月)、年長児 (6歳2か月) の順にソースモニタリングが正確になるという発達的变化が示されている。

近藤の一連の研究における対象児の平均年齢に違いがないことを踏まえると、発達差の違いはソースモニタリングを測定する課題による影響と考えられる。例えば、近藤 (2009) では、男女

の音声で単語情報や自己紹介文情報を提示してソースモニタリングを測定しているが、近藤（2010a）は、音声（男性または女性）と映像（音声情報と別の性別の男女）で単語情報を提示してソースモニタリングを測定している。また、近藤（2010b）では、男女の音声で単語や文といった情報量や自己紹介があるか否かといった文脈を操作した4条件を設けてソースモニタリングを測定している。つまり、音声や映像といった提示形態の要因および単語や文といった提示情報の要因によって細かな年齢変化に違いが生じていると考えられる。従って、本研究においても幼児期の発達的变化を詳細に把握するために4-6歳児を対象とし、提示情報の要因に関するソースモニタリングの発達の示唆を得ることとする。

提示情報の要因に関して、近藤（2011）は、成人を対象に単語の性質が男女の発話者を識別するソースモニタリングの課題成績に及ぼす影響を調べている。具体的には、提示情報について一致条件（男性が男性、女性が女性を連想する単語を発する）、不一致条件（男性が女性、女性が男性を連想する単語を発する）、統制条件（男性や女性が単語を発する）の3条件のソースモニタリング課題を行った。その結果、一致条件と統制条件よりも不一致条件の成績が有意に高かった。この結果は、情報と情報源との関連性だけでなく、提示情報自体の性質もソースモニタリングの正確さに影響し、提示情報が男女の発話者の性別と一致しない場合は、提示情報と情報源の間に不自然さや違和感が生じることで情報と情報源の結びつきが強くなり、ソースモニタリングが正確になることを示唆している。

近藤（2011）において提示情報自体の性質がソースモニタリングの正確さに影響を及ぼすことが示唆されたことを踏まえ、近藤（2023）は、成人を対象に感情喚起語を用いた研究を行っている。具体的には、単語の中でもポジティブやネガティブといった感情を喚起する語は、そうでない語（ニュートラル語）と比較して、情報と情報源との結びつきを強め、結果的にソースモニタリングが正確になる可能性について検討した。その結果、ポジティブ語よりもネガティブ語の得点が有意に高く、ニュートラル語との間に有意な差はなかった。従って、結果は予測を部分的に支持し、ネガティブ語はポジティブ語と比較して提示情報と情報源との結びつきを強くするが、感情喚起語はそうでない語と比較して提示情報と情報源との結びつきを強くする可能性については明らかにならなかった。この理由として、近藤（2023）は課題で用いた単語刺激の問題点を論じている。すなわち、感情喚起語として用いた漢字二字熟語の選定に限界があり、例えば“小麦”という語はニュートラル語として用いたが、友達の名前だったから覚えやすかった等、参加者によっては感情を喚起しない語として捉えなかった可能性等を論じている。

感情喚起語がソースモニタリングに及ぼす影響について、近藤（2023）ではネガティブ語に関してのみソースモニタリングに影響を及ぼすことが示唆された。この影響は、幼児においても予測される。むしろ、提示情報等の要因の影響は、成人と比較してソースモニタリング能力が発達途上にある幼児のほうが、感情や想像力が豊かなため影響を強く受けやすいと考えられ、それが、結果的にソースモニタリングの正確さに影響すると予測できる。従って、本研究では、幼児を対象に感情喚起語がソースモニタリングに及ぼす影響について発達的に検討することを目的と

する。具体的には、男女の発話者を識別する外部情報のソースモニタリング課題を用いて、提示する単語情報に、ポジティブ語、ネガティブ語、ニュートラル語を使用する。その後、ソースモニタリングテストを実施し、テスト後には、各発話者の印象に残った単語とその理由について尋ねる。予測としては、年齢と共にソースモニタリングの発達の変化がみられ、ポジティブやネガティブといった感情喚起語はそうでない語と比較してソースモニタリングが正確になると考えられる。

方 法

実験計画

3（年齢：4歳児、5歳児、6歳児）×3（感情喚起語：ポジティブ語、ネガティブ語、ニュートラル語）の2要因計画であり、第1要因は参加者間要因、第2要因は参加者内要因であった。

参加者

幼児57名であり、4歳児19名（平均年齢4歳3か月；範囲3歳11か月～4歳7か月；男児8名、女児11名）、5歳児20名（平均年齢5歳2か月；範囲4歳10か月～5歳7か月；男児14名、女児6名）、6歳児18名（平均年齢6歳1か月；範囲5歳8か月～6歳7か月；男児9名、女児9名）であった。実験途中で集中力の低下等の理由により実験を続けることが困難な幼児はいなかった。

材料・装置

刺激語 ポジティブ語、ネガティブ語、ニュートラル語の3種類を予備調査により選定した。まず「幼児・児童の連想語彙表」（国立国語研究所、1981）、五島・太田（2001）および五島・太田（2002）を参考に刺激語の候補を45語選出した。その後、実験に参加しない幼児5名（平均年齢4歳3か月；範囲3歳3か月～5歳9か月；男児2名、女児3名）を対象に予備調査を実施した。調査方法は、個別に単語を知っているかを確認したうえで“これから単語を言うからどんな気持ちか教えてくれる”と伝え「うれしい・好き」、「普通」、「悲しい・イヤ」の顔が描かれた表情図も併せて提示して選択させた。表情図は、渡邊・近藤（2020）で作成された表情図のうち、「喜び」、「悲しみ」、「真顔」の表情図を使用した。予備調査の結果より、全員が知っている単語で、気持ちの回答が一致したものについて、それぞれポジティブ語、ネガティブ語、ニュートラル語とした。その後、単語のバランスを調整し、最終的にポジティブ語、ネガティブ語、ニュートラル語各9語の計27単語を実験刺激として決定した。Table 1に実験で使用する感情喚起語を示す。

次に、天井効果や床効果を防ぐために単語数や課題の難易度を検討した。18単語版と27単語版の2種類のソースモニタリング課題を作成し、実験に参加しない幼児5名（平均年齢4歳3か

月；範囲3歳3か月～5歳9か月；男児2名、女児3名）を対象に予備調査を実施した。その結果、27単語で天井効果も床効果も示さないことが確認されたため、最終的な刺激数として決定した。

Table 1 実験で使用する感情喚起語

ポジティブ語	ネガティブ語	ニュートラル語
項目	項目	項目
プレゼント	雷	机
お祭り	鬼	タオル
誕生日	注射	靴下
シャボン玉	おばけ	ボタン
動物園	地震	コップ
ジュース	毛虫	マット
おやつ	蜂	ドア
大好き	涙	新聞
ありがとう	大嫌い	耳

ソースモニタリング課題は学習段階とテスト段階で構成された。選定された27単語のうち学習段階では18単語を使用した。内訳は、男性と女性の音声で各9単語使用し、男女の音声にはそれぞれポジティブ語、ネガティブ語、ニュートラル語が各3単語含まれていた。単語の提示順序はランダムにして計3リストを作成した。ソースモニタリングテストでは、27単語を使用した。内訳は、学習段階で男女の音声で提示した18単語に、提示しなかった9単語（ポジティブ語、ネガティブ語、ニュートラル語、各3単語）を追加した。テスト段階では、質問順序の異なるリストを3種類作成し、参加者はランダム選択された1リストについて回答した。なお、リストの作成にあたっては同じ情報源の単語が2回以上連続して続かないようにした。

音声刺激 音声刺激は、男女各1名の音声を使用した。音声の録音は、ノイズを避けるために静かな部屋でICレコーダーを用いて行った。単語の順序を統制するために男女それぞれに3リストを作成した。なお、1リストには男性が読み上げる9単語、女性が読み上げる9単語が含まれていた。録音はリストごとに行った。録音時に発話者が1つの単語を読み上げてから次の単語を読み始めるまでの時間間隔は約3秒であった。また、発話者が全ての単語を読み上げる時間は約30秒程度であった。音声の録音後、実験者は男女の音声をノートパソコンへ取り込み、実験ではノートパソコンにオーディオスピーカーを接続して音声刺激を提示した。なお、実験では男女の音声でそれぞれ録音した3つの音声刺激リストの中からランダムに1リストを選択して参加者に提示した。

記入用紙 テスト段階で用いる記入用紙はA4用紙を使用し、リストごとに3種類作成した。一番上には、名前、性別、生年月日、調査日、提示順序（男性→女性、女性→男性）が記載できるように作成し、その後、練習課題の6項目の再認テストとソースモニタリングテストの結果の記載欄、そして、本実験の回答が記載できるようにリストごとに1-27番までの番号と単語名を

記し、再認テストの選択肢 (0、1)、ソースモニタリングテストの情報源 (M・W・N) に○が記載できるよう回答欄を設けた。

手続き

実験は、保育園内の静かな一室で個別に実施した。実験者は参加児とテーブルを挟んで向かいの椅子に座り、テーブルの左右にスピーカーを置いた。ラポールの形成後、実験者は“これからクイズをします。まずはやり方を教えるね”と教示し、練習課題を行うこと、スピーカーからは男性と女性の音声で提示されることを説明した。また、練習では分からなかったら分からないと言ってほしいことを伝えて、それぞれの音声を提示した。なお、男女の音声のうちどちらを最初に提示するかは、本課題での順序と一致させた。

練習課題では6単語を使用し、学習段階において男女の音声をそれぞれ提示した直後、実験者は“クイズの答え方を教えるね”と教示して、実際に提示した単語を用いながら再認テストとソースモニタリングテストの答え方を説明した。なお、練習課題では質問に答えられない場合にはヒントとして何度も単語を提示し、参加児が完全に質問を理解できるようにした。なお、全ての参加児は練習課題で一連の流れを理解し、正しく回答することができた。

練習課題直後に本課題を実施した。まず学習段階において男女の音声を提示した。なお、男女の音声は交互に提示されるのではなく、一方を全て提示した後にもう一方を提示した。各年齢の参加児の半数には男性の音声を先に提示し、残りの半数には女性の音声を先に提示してカウンターバランスをとった。学習段階終了直後、実験者はスピーカーを参加児から見えない場所に移動しテストを実施した。実験者は“これからさっき聞いたことについてクイズをするから答えてね”と説明し、単語ごとに再認テストとソースモニタリングテストを実施した。実験者は、各単語について“○○は聞いた？聞かなかった？”と尋ね、さらに、その単語について、“○○は男性の声で聞いた？女性の声で聞いた？それとも聞かなかった？”と尋ね、これら一連の教示を各単語について繰り返した。なお、ソースモニタリングテストは、再認テストで提示した全ての単語について実施した。最後に、男性と女性が言った単語の中で一番心に残った単語とその理由についてそれぞれ尋ねた。実験に要した時間は約15分であった。

倫理的配慮

参加児は未成年であるため、園長および全ての保護者に対して研究協力の依頼、主旨および注意事項を説明し、保護者の同意を得た場合にのみ実験を行った。同意書は研究協力者用および研究者用を作成した。なお、本研究は、研究者所属の生命倫理委員会の承認を得たうえで実施した(承認番号 17-04-009)。

結 果

4歳児、5歳児、6歳児の再認テストの各指標における平均値と標準偏差を Table 2 に示す。再認テストにおける Hit 率は学習段階において聞いた単語について“聞いた”と正確に判断した場合の正再認率、FA 率は、学習段階において聞かなかった単語について“聞いた”と誤る場合の虚再認率、そして、 d' は判断の正確性を意味する。各指標について、年齢を要因とする分散分析を行った。以下の統計的分析では有意水準を 5% に設定した。なお、 d' の算出では Hit 率が 100% になる場合や FA 率が 0% になる場合があったため、Hit と FA の数にそれぞれに 0.5 を加える補正を行った上で統計的分析を実施した。その結果、Hit 率では、年齢の主効果が有意ではなかった ($F < 1$)。FA 率では、年齢の主効果が有意であったため ($F(2,54) = 4.94, p < .05$) 下位検定を行った。下位検定の結果、4歳児は6歳児よりも聞いていない項目に対して聞いたとする誤りが多かった。また d' でも年齢の主効果が有意であり ($F(2,54) = 410.34, p < .01$)、下位検定の結果、4歳児、5歳児、6歳児の順に d' の値が有意に高かった。

Table 2 各年齢における再認テストの各指標の平均値と SD

	4歳児 (<i>N</i> = 19)	5歳児 (<i>N</i> = 20)	6歳児 (<i>N</i> = 18)
再認テスト			
Hit 率	0.88 (0.11)	0.85 (0.12)	0.85 (0.13)
FA 率	0.31 (0.36)	0.12 (0.29)	0.04 (0.08)
d'	1.59 (0.83)	2.52 (0.88)	10.19 (1.60)

ソースモニタリングテストは、正答を 1 点としてソースモニタリング得点を参加児別に求めた。その後、ポジティブ語、ネガティブ語、ニュートラル語の平均値と標準偏差を算出した。なお、情報源の選択肢として“聞かなかった”項目については、単語情報があったかなかったかの再認判断にあたる確認になるため、以降の情報源の識別からは除外して分析を行った。従って、分析対象となる単語は“聞かなかった”が正解になる 9 単語を除外した 18 単語であった。Table 3 に各年齢におけるソースモニタリング得点を示す。

Table 3 各年齢と感情喚起語におけるソースモニタリングテストの平均値と SD

	4歳児 (<i>N</i> = 19)	5歳児 (<i>N</i> = 20)	6歳児 (<i>N</i> = 18)
ソースモニタリングテスト			
ポジティブ語	3.58 (1.23)	4.80 (0.87)	4.56 (1.17)
ネガティブ語	3.37 (1.35)	3.90 (0.94)	4.61 (0.95)
ニュートラル語	3.37 (1.31)	3.35 (1.11)	3.56 (1.57)

ソースモニタリング得点について 3 (年齢：4歳児、5歳児、6歳児) × 3 (感情喚起語：ポジテ

イブ語、ネガティブ語、ニュートラル語) の2要因分散分析を行った。以下の統計的分析では有意水準を5%に設定した。その結果、年齢と感情喚起語の主効果が有意であった ($F(2,54) = 5.02, p < .05$; $F(2,108) = 9.19, p < .001$)。また、年齢と感情喚起語の交互作用が有意傾向であった ($F(4,108) = 2.35, p < .10$)。Ryan法による多重比較を行った結果、年齢については、4歳児よりも5歳児と6歳児の得点が有意に高く、感情喚起語については、ニュートラル語よりもポジティブ語とネガティブ語の得点が有意に高く、ポジティブ語とネガティブ語との間に有意な差はなかった。Figure 1に感情喚起語におけるソースモニタリング得点の平均値と標準偏差を示す。

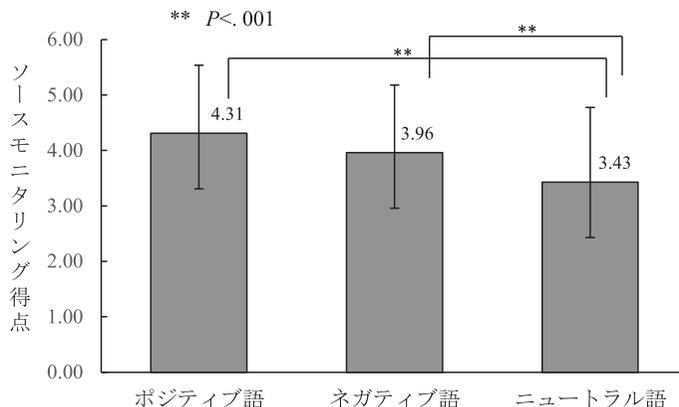


Figure 1 感情喚起語におけるソースモニタリング得点の平均値とSD

ソースモニタリングテスト後に、各情報源について特に印象に残った単語を尋ねた結果、4歳児68%、5歳児60%、6歳児94%の回答が得られた。回答については、幼児が分からないと言った場合にヒントや例を伝えることはしなかった。また、ほとんどの幼児が複数回答していた。

内訳は、4歳児は30単語中17単語が実際に本実験で使用した単語であり、ポジティブ語が7単語で最多、次にネガティブ語とニュートラル語が5単語ずつであった。ポジティブ語では「誕生日」、ネガティブ語では「おばけ」が多かった。理由を回答した幼児は19名中6名であり“好きだから”“聞いたから”等であった。5歳児では、34単語の回答が得られ、29単語が実際に本実験で使用した単語であった。ニュートラル語が最も多く11語、次にネガティブ語10語、ポジティブ語8語であった。4歳児同様に、「誕生日」や「おばけ」が多かった。理由を回答した幼児は20名中6名であり“聞いてたから”がほとんどであった。6歳児では、53単語が確認され、45単語が本実験で使用した単語であった。ネガティブ語が最も多く21語、次にポジティブ語17語、ニュートラル語7単語であった。「おばけ」が最も多く、“聞いていたから”に次いで“怖いから”という回答であった。また、「動物園」や「誕生日」も多く“聞いていたから”に次いで“うれしいから”という回答が得られた。理由を回答した幼児は18名中16名であった。

考 察

本研究の目的は、幼児の外部情報のソースモニタリングに感情喚起語が及ぼす影響と発達の変化について検討することであった。予測として、感情喚起語は幼児の外部情報のソースモニタリングの正確さに影響し発達の変化がみられると考えられた。まず、発達の変化に関して、再認テストの d' では、4歳児、5歳児、6歳児の順に正確な再認が行えるという差異が確認された。再認テストの結果は、従来の研究 (e.g., 近藤, 2009; 近藤, 2010a; 近藤, 2010b; Kovacs & Newcombe, 2006; Lindsay et al., 1991; Ruffman, Rustin, Garnham, & Parkin, 2001) と一致する。例えば、近藤 (2009) は、年少児 (平均年齢 4 歳 2 か月)、年中児 (平均年齢 5 歳 3 か月)、年長児 (平均年齢 6 歳 2 か月) を対象に、男女の音声を用いて提示する情報や文脈を操作 (単語課題と自己紹介文課題) し、発話者を識別する外部情報のソースモニタリング能力を発達的に検討している。そして d' の結果では、年少児 (1.31) と比較して年中児 (2.70) と年長児 (3.10) の再認が正確であるという発達の差異を示している。また、音声と映像の情報源を識別する研究を行った近藤 (2010a) も同様の結果を示している。

さらに、近藤 (2010b) では、年少児 (平均年齢 4 歳 2 か月)、年中児 (平均年齢 5 歳 3 か月)、年長児 (平均年齢 6 歳 2 か月) を対象に、男女の音声を用いて、提示する情報や文脈を操作 (単語課題、好きな単語課題、文課題、自己紹介文課題) し、発話者を識別する外部情報のソースモニタリング能力を発達的に検討している。そこでの幼児の d' の結果は、本研究の結果と同様に、年少児、年中児、年長児の順に正確であるという発達の差異を示している。近藤 (2010a) が論じているように、 d' において生じた発達差は、FA 率の発達的変化が影響するといえる。Hit 率ではどの年齢も同程度の成績を示すが、FA 率は年齢が低いほど高い値を示す。つまり、提示されなかった情報に対して提示されたと多く誤るのである。従って、幼児期の再認の特徴として、4歳児は Yes バイアスがかかり、新奇な情報を既知の情報とする誤りが多いが、年齢が上がるとともにこの誤りは減少して再認の正確さが増していくと解釈できる。

ソースモニタリングテストでは、4歳児よりも5歳児と6歳児のソースモニタリングが正確であるという発達の変化が確認された。この結果も、従来の研究 (e.g., 近藤, 2009; 近藤, 2010a; 近藤, 2010b; Kovacs & Newcombe, 2006; Lindsay et al., 1991; Ruffman et al., 2001) と一致する。再認テスト同様にソースモニタリングテストも研究によって、4歳児と5・6歳児のソースモニタリングの発達の差異が示される場合 (近藤, 2009)、4・5歳児と6歳児の発達の差異が示される場合 (近藤 2010a)、4歳児、5歳児、6歳児の順に発達の変化が示される場合 (近藤, 2010b) があるが、Lindsay et al. (1991) が論じるように、全てこの能力が4-6歳の間に発達するという見解に一致する。3つの年齢段階の変化については、厳密言えば本研究は近藤 (2009) における自己紹介文課題の結果と同様の結果を示した。以上のことから、4-6歳児の外部情報のソースモニタリングの発達的变化については、4歳児はソースモニタリングの識別自体に不安定

さが残る年齢段階であること、6歳児は成人と類似した傾向を示すことがうかがえる。そして5歳児は、4歳児寄りの傾向を示す場合と6歳児寄りの傾向を示す場合があり、それらには要因が影響すると考えられる。

感情喚起語の結果は予測を支持した。すなわち、幼児において、ポジティブ語やネガティブ語といった感情を喚起させる語は、そうでないニュートラル語と比較してソースモニタリングの正確さが増した。従って、幼児の外部情報のソースモニタリングでは、感情喚起語はそうでない語よりも提示情報と情報源との結びつきを強くすることが示唆されたといえる。傾向として、4歳児はネガティブ語、ポジティブ語、ニュートラル語の3条件の得点間にほぼ差がなく、5歳児ではポジティブ語の得点が高くなり、6歳児になるとポジティブ語に加えてネガティブ語の得点も高くなっていることがうかがえた。また、ニュートラル語に関しては、4、5、6歳児においてほぼ同程度の得点を示した。従って、有意傾向ではあったが年齢と感情喚起語の交互作用の結果も踏まえると、幼児期の感情喚起語の影響は次のような発達の解釈が可能性として考えられる。まず、4歳児は感情喚起語の影響を受ける段階にはなく、ソースモニタリングの識別ができれば始める萌芽の時期であると考えられる。5歳児になると感情喚起語の影響を部分的に受けてポジティブな語を発した人を記憶しやすくなり、そして、6歳児になると感情喚起語の影響を受けてポジティブな語に加えてネガティブな語を発した人も記憶しやすくなるという発達の変化が考えられる。なお、4、5、6歳児においてニュートラル語の成績がほぼ同程度であったことは、4歳児であっても他の年齢と同様にソースモニタリングを識別できる場合があることを示唆しており、発達の変化がある場合とそうでない場合を丁寧に解釈していく必要があると考えられる。

ソースモニタリングテスト後に尋ねた特に印象に残った単語の結果からは、年齢による変化が顕著に表れた。6歳児はネガティブ語に対する表出数が最も多く“怖いから”といった理由づけも行っていた。分散分析の結果からは、ネガティブ語とポジティブ語間の差異はみられなかったが、6歳児が印象に残っている語として表出した単語はネガティブ語が多いことも分かった。また、6歳児は全体として感情喚起語の表出数が多いこともうかがえた。一方、4、5歳児では練習課題で用いた単語や全く関係のない単語も表出されており、理由づけ自体の難しさもうかがえた。従って、情報源の識別に関する質的な質問に回答できるのは、6歳児以降にならないと難しいことが考えられた。

成人を対象に研究した近藤（2023）では、ネガティブ語はポジティブ語と比較して提示情報と情報源との結びつきを強くするが、感情喚起語はそうでない語と比較して提示情報と情報源との結びつきを強くするという点に関しては示唆されなかった。ニュートラル語の印象が強かったという単語刺激の問題が可能性としてあったにせよ、成人では、ポジティブ語よりもネガティブ語を発した人を記憶しやすいたことが示されている。この結果に、6歳児の結果の傾向および印象を尋ねた際にネガティブ語が多く表出されたことを踏まえると、感情喚起語が及ぼす影響は、可能性として次のように考えられる。すなわち、ソースモニタリングの萌芽の時期にあたる4歳児では感情喚起語の影響は受けませんが、発達につれてまずポジティブ語、次いでネガティブ語の影響

を受けるようになる。そして、最終的にはネガティブ語だけの影響を受けるようになるのではないだろうか。この点については、今後、6歳児以降の発達的变化を追う必要がある。本研究では、幼児期のソースモニタリングの発達と感情喚起語が幼児期のソースモニタリングに影響を及ぼすこと、つまり、提示情報自体の性質が情報と情報源の結びつきを強めてソースモニタリングの識別を正確にすることを示唆した点で意義があるだろう。

付記

調査にご協力くださった園の先生方および参加児の皆様にご心より感謝申し上げます。本研究は、科学研究費助成事業の助成を受けた成果の一部です（課題番号 26780371）。

文献

- Drumme, A. B., & Newcombe, N. S. (2002). Developmental changes in source memory. *Developmental Science*, 5(4), 502-513.
- Gopnik, A., & Graf, P. (1988). Knowing how you know: Young children's ability to identify and remember the sources of their beliefs. *Child Development*, 59, 1366-1371.
- 五島史子・太田信夫 (2001) 漢字二字熟語における感情価の調査 筑波大学心理学研究, 23, 45-52.
- 五島史子・太田信夫 (2002) 感情語における連想語の差異 筑波大学心理学研究, 24, 37-42.
- Johnson, M. K., Hashtroudi, S., & Lindsay, D. S. (1993) Source monitoring. *Psychological Bulletin*, 114, 3-28.
- 国立国語研究所 (1981) 幼児・児童の連想語彙表 東京書籍.
- 近藤 綾 (2009) 発話者を特定する外部情報のソースモニタリング能力に関する発達的研究：自己紹介課題を使用した検討, 発達心理学研究, 20, 145-154.
- 近藤 綾 (2010a) 音声と映像を区別する外部情報のソースモニタリングに関する発達的研究 日本認知心理学研究, 8, 73-82.
- 近藤 綾 (2010b) ソースモニタリング能力に関する発達的研究－提示情報が幼児の発話者の識別に及ぼす影響－ 発達研究, 24, 78-84.
- 近藤 綾 (2011) 提示情報の男女性が男女の発話者を識別するソースモニタリングに及ぼす影響 広島大学大学院教育学研究科紀要 第三部 (教育人間科学領域), 60, 147-152.
- 近藤 綾 (2023) ソースモニタリングに提示形態と感情喚起語が及ぼす影響 園田学園女子大学論文集, 58, 26-35.
- Kovacs, S. L., & Newcombe, N. S. (2006) Developments in source monitoring: The role of thinking of others. *Journal of Experimental Child Psychology*, 93, 25-44.
- Lindsay, D. S., Johnson, M. K., & Kwon, P. (1991) Developmental changes in memory source monitoring. *Journal of Experimental Child Psychology*, 52, 297-318.
- Ruffman, T., Rustin, C., Garnham, W., & Parkin, A. J. (2001). Source monitoring and false memories in children: Relation to certainty and executive functioning. *Journal of Experimental Child Psychology*, 80, 95-111.
- Sluzenski, J., Newcombe, N. S., & Ottinger, W. (2004). Changes in reality monitoring and episodic memory in early childhood. *Developmental Science*, 7, 225-245.
- 渡邊大介・近藤 綾 (2020) 幼児期における感情を表すオノマトペの理解－表情認識との関連と場面想起の分析を通じて－ 大谷大学教職支援センター研究紀要, 11, 73-80.

[こんどう あや 発達心理学]